

---

# 厨二病患者の基地外的思想

破壊神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

厨二病患者の基地外的思想

### 【Nコード】

N0713Z

### 【作者名】

破壊神

### 【あらすじ】

この作品は、このサイトで初投稿となるいわゆる処女作です。

初心者による作品ですが、楽しんでいただければ光栄です。

ちなみに、この作品はエブリスタ様にて投稿した作品の改訂版です。

この作品はフィクションであり、  
実在の人物・団体・事件などは  
一切関係ありません。

## 裏・プロローグ 1 (前書き)

はじめまして、作者の破壊神です。

この作品をお読みになりありがとうございます。

これから、頑張ってくださいますのでよろしくお願いします。

## 裏・プロローグ 1

現代、というか、地球上には存在しないような、例えば、別の世界と比喻していいような、全てが白や黒が入り乱れる空間、いわゆる灰色の空間の中に一人の青年が立っていた。

そこで、青年は語り始めた。

俺は死んだらしい。

突然、こんなことを言うのは可笑しいだろうが、もう一度言う…俺は…死んだらしい……

なぜ、このような事になったのかは、時を遡る事になるが、聞いてくれ。

〈回想〉

3時間前

その日、俺が組んでいるバンドの練習をし、練習が終わった時の事であった。

練習をしているライブハウスは、自分の自宅から自転車、電車の移動手段を用いて、約1時間30分もかかる。

自宅は山に囲まれた田舎にあるため、地元にはライブハウスなどない。

いま、俺が居るような県庁所在地であるような都市部に行かないと  
ない。

そのため、電車代などもバカにならないため、せつかくだから、遊  
ぼう。という流れになった。

建前は置いといて、俺自信、ぶっちゃけるとただ、遊びたかっただ  
けなんだが…

そんなこんなで、自分のCDショップで好きなバンドのCDを見た  
り、アニ○イトでお気に入りの今期アニメのグッズなどを購入した  
り、と今の時間を楽しんでいた。

しかし、運命と言うのは時に残酷なものだ。

バンドメンバーと共に夕食の為に、比較的安価で食事の出来るファ  
ミレスに向かう為、徒歩にて移動の最中だった。

その時間は、帰宅ラッシュの為か、道路は渋滞をしていた。

それを歩道から、メンバー達と会話をしながら、眺めていた。

歩道者側の信号が青になった為、横断歩道を渡ろうとしたら、普通  
車がこちらに猛スピードで向かって来た。

始めは、その普通車との距離は約200メートルぐらい離れていた  
ため、あまり気にしなかった。

しかし、お互いの距離が50メートルぐらいに差し掛かると、流石

に違和感を感じた。

その時、普通車に目を向けると周囲の建物の光で照らされていたので、運転手の顔が見えた。

良くみると、居眠り運転をしていたようだった。

これはマズイと思いつたら、俺達と同じく横断歩道を渡っていた人々の中の一人が、「早く渡れっ！」と叫んだ。

周りの人々は歩道へ向かって走りだす中、幼い少女。文字通り、幼女が一人横断歩道へ取り残されていた。

普通車は、横断歩道の目の前まで迫っていた。

俺は、その幼女へ哀れむ目を向けていた。

こんな幼い少女が命の危険にさらされているのか、それに、普通車の出すスピードを見ていると、助かりはしないだろう。

と、思っていた。

そんな事を考えていたら、自分の体が突然動いていた。

(あるえー？　なんで横断歩道に近づいてるの？)

自分自信の思考とは別の“なにか”に操られてる感覚だ。なんとというか、現実味のない感覚が俺を襲った。

「おい！君！！なにをやってるっ！？」

「なにをやってるんだよっ！お前っ？！危ないぞっ！」

周りの人々やバンドメンバーからの声だろう。

絶えず、周りの人々の声がするが、思考がボンヤリとしながら、それでも横断歩道に残された少女の元へ行く。

普通車との距離が10メートルに差し掛かった頃、俺は少女の目の前に着いた。

今だに、ボンヤリとしながら少女の表情を見ると、笑っていた。

普通、というか、だいたいの人はこの状態を怖がるだろ？しかし、少女はだいたいの人に当て嵌まらないみたいだった。

そして、俺は少女を突き飛ばし、少女の変わりに普通車に轢かれた。

轢かれた時、上空へ跳んだ。そんな中でも少女から目を離さなかった。

否、離せなかったのだ。

そんな中、今だ、笑みを絶やさない少女…。

(これは、シュールな光景だなあ。)

と考えながら、俺が、俺達が見ていた夢がここで終わるのだろうか。と思った。

ドンッ！

頭から地面に着地したようだ。

尋常ではない痛みが俺を襲う。

痛みに襲われながら、自分の家族、夢への思い、二次元に住まう我が嫁や子、孫達、そして、自分が助けた少女の事を考えた。

だが、周りの人々の声がする。

「だ、大丈夫かっ？」

「誰かっ！救急車を呼べっ！」

「おい、おい！しっかりしろよっ！」

うん、なに言ってるかわかるが、言葉を認識できない。俺、死ぬな…。

と思った。

そんな中少女が近づいてきた。

少女は口にした。

「さあ、始まるよ。貴方の物語が。」

「えっ？」

「また、逢おうね。」

そこで、意識が途切れた。

以上が、俺が死んだ理由だ。

長すぎてしまったが許して下さい。

התאחדות התעשייתית הישראלית

## 裏・プロローグ 1（後書き）

うむ…、こんな物でいいかな？

話の内容からに、いわゆる転生物です。      メタ発言

プロローグは二話に分けます。

## 裏・プロローグ 2 (前書き)

どうしてこうなった…

## 裏・プロローグ 2

どうしていいか途方に暮れていると、どこからか老人特有の声があった。

「なにをシラけた顔をしているのかね？青年よ。」

「ん!？」

突然の事だから驚いた。

声の主に目を向けると、ハリリーなポッターよろしくの魔法学校校長みたいな老人がいた。

しかも、俺の身長（170cmあります）より高く浮いてるし……

あまりに、非現実的だが自分の死を理解してしまった為、一瞬の自暴自棄のように、もうどうにでもなれ。といった考えになっている。

「ほうほう、驚かしてすまないね。何分、はじめて下界からの客人な為に調子に乗ってしまったようじゃ。」

好々爺よろしくの笑顔を向けてきた。

コイツ……やりおる……ゴクリツ 意味不

とりあえず、笑ってごまかさないで、謝罪しろや、ああん？

「すまんのう、それと先程から態度が変わっておるぞ」

おれ、喋ってないんだが……

「ああ、読心術というものがあつてのうっ。」

老人よ…何者だし…

「ワシ？ワシは、いわゆる神かのう」

えっ？…

「なんじゃい！？その白い目は…」「いやあ、さ、うん…

「信じはしないか…」

はい

「即答かのう（泣）…」

宙に浮いた神（核爆）様が泣いている…

この短時間ですごい体験をしたなあ…俺…しかも、神（核爆）様が泣いてるんだぞ？

カオスだっ……………

閉話休題

「ゴホンッ…それでは、本題に入ろう。君が“なぜ”ここに導かれたかを…」「導かれただ…と？」

「うむ、君は、君がいた世界とは別の、ある世界の“意思”、君が死ぬ直前に見た少女がいたじゃろ？」

はい、顔は覚えてませんが、なんとというか、‘違和感’がありました。

「そうじゃ、顔というか、少女と認識出来るが、‘ああいう存在は、存在自体が大きい為か認識が正確には出来ない’のじゃ」

言われてみれば…‘幼い少女だと認識はしたが、顔の作りまでは、認識出来なかった’。

ただ、表情で笑ってるのはわかりました。

「なんじゃと？表情…そこまで認識出来るとは……」

どうしました？

「いや、のう、通常は認識出来るだけでも凄いんじやが、表情まで認識出来るとは…君が“なぜ”あの‘世界の意思’に導かれたか合点がいったよ。」合点というと？

「すまんのう、いくら神でも自分の管轄外の世界の存在には介入出来ないのだよ。」

ということは…って、神は複数いるんですかい！

「うむ、数多の世界がある故に、大体は世界一つに神が一人就くじやが、まあ、例外はいるが…」

はじめてききましたよ…

「まあ、君達の世界の人間にはわかるまえ、まあ、簡単な話、君の住んでいた国で八百万と言う言葉があるじゃろ？簡単な話はそういうことじゃ」

な、なるほど… いまいち理解していない

「ちなみに、君は‘導かれた’と言ったが、ワシはそこまで介入出来ない…」

そこまで、というと少なからずは介入出来るんですか？

「うむ、まあ、加護を与えるくらいしか…。まあ、この場所は元いた世界と君を導こうとしている世界との境界線…言い方は悪いが、君は死に、魂が‘向こうの世界’に所有権が移ってしまった…すまんのう」

神は今だ、宙に浮きながらやるせない顔をしている。

いえ、気にしないでください。神様（尊敬したので普通によびます）がそこまでおっしゃってくれるのです。それだけで、うれしいです。

「そういつてくれると助かるわい。わしらの都合ですまないんじゃないが、上の命令でう。事前にこのような事になるのはわかっていたが、ワシの権限では介入は無理なのじゃ…本当にすまぬ…」

いえ、本当に大丈夫ですから、ただ、向こうの世界はどういう場所なのかを聞きたいです。あと、これからどうなるかも…

「ああ、把握しているのは、先程言った数多の世界の一つであること、その世界は、魔法の世界…。いわゆるファンタジーの世界じゃ」

ファンタジー…ゴクリッ

「ちなみに、血生臭い世界でう。文明は君の元いた世界、すなわちワシが管轄としている世界より科学の進歩などを考えると中世ヨーロッパのような場所じゃ」

なにそれ…死亡フラグの匂いがプンプンと…

「長々と話てすまないが、もうそろそろ、君の魂は、向こうへ渡る。幸運を祈る。あと、少ないがワシからのプレゼントじゃ、神であるワシの加護を与えよう。ただ、そこまで凄い能力ではないが…ワシの出来る限りの力を与える。」

なにからなにまですみません。感謝します。

「いいのじゃ、元々、ワシが管轄する世界の住民じゃ、少しぐらい鼻厘したって大丈夫じゃろう。しかし、君は冷静なのじゃな。」

まあ、死んだ事により自暴自棄というか、開き直ってるようなものです。なんというか、今の自分の現状が実感しないというか…。

「なるほどのう（強いと思っていたが、やはり、不安か…。一瞬の自分に暗示をかけての現実逃避をしておる…）むっ、そろそろ時間か…それでは、加護を与えよう。」

神は青年になんか、光を浴びせたっ！　ここ重要。

ちよｗｗｗｗｗｗホ○ミかよｗｗｗｗｗｗ（某龍の冒険の魔法に似ていた）

「よし、これで大丈夫じゃ、向こうに言っても元気でのう」

スルーかよ…。ええ、いろいろとありがとございました。

「なに、気にするでない。もう、君の存在は向こうへ渡っている。君の友人や家族達は任せよ。アフターケアはしとくからのう」

あ、なにからなにまでありがとございます。（そういえば、家族か…）

「なに、お安いご用じゃ。（ふむ、自分で精一杯だった為、生前の係わりなどに関しては頭から抜けていたか…難儀なものよ）」

そうして、青年の体は徐々に光の粒子となり始めた。

「もう、時間か…」

これはっ…

「いま、君は境界線を渡っているのじゃ」

なるほど…

「最後に言い残すことはないかのう？」

ええ……ありますのとも……言わせてください……童貞で死ぬのは辛い  
です……しかも、異世界へ拉致です……（泣）

「う、うう……やめい……涙が出てきたのじゃ……仕方ない……向こうでフ  
ラグが出来やすい建設士にしてやるう」

あ、ありがとう……（号泣）

「うむ、頑張るのじゃぞ……」

は、はい、本当にありがとうございます……（涙目）

そして、俺の体は完全に粒子となり消えた。

「難儀なものじゃ……口調といい態度といい、やはり、不安だったの  
か……」

老人はその場で思い詰めた顔をしながら、そう呟いた。

## 裏・プロローグ 2 (後書き)

いや、まさかの……

や、やめてください！反省はしてるんです！

と言うわけで、主人公が精神が不安な為、口調、態度が所々変わらせてみましたが、どうでしたか？

よかったら、感想をお願いしますm(´▽`)m

## ブログ 1 (前書き)

更新遅くなってすみません。

先日まで、修学旅行に行っておりました故。

ちなみに、沖縄に行ってきました。

## プロローグ 1

やあ、俺だよ俺！そうそう、親戚の拓也だよっ！さっき事故っちゃってさ、三日以内で100万用意してくれない？えっ？受け取り方法？ああ、××××××××××って口座に頼むY（ry

しばらくお待ちください。

はっ！夢か…

つい、俺的な詐欺をしている夢を見ちまったぜっ！

とりあえず、さ

神様の所から粒子になって消えた後に、意識飛んじやったんだよね

w

もう、ビックリするほどユートピア的なw

あ、あれは除霊方法か

それでさ、意識が戻ったのはいいんだが…またしても…ここどこよ？

そう…俺が居るのはなにを隠そう…目が開きません（泣）

それと、液体の中に居るような…まるでプールや川、海に沈んでるような感覚です。はい。

あと、体の姿勢というか体やへソに違和感が…体は思うように動かないし、へソにはなにかが付いてるような……

それに、なんとというか…いまの状況が懐かしいというか…以前、それも俺が前世で体験した…安心感に包まれて、安息出来るような場所…。

そして、“いまだ自分自身の存在が不安定と感じる”。

このなんとももどかしいような感覚…。

まあ、考えるのはいいが、呼吸が出来ないのによく生きてるよな…俺…。

ああ、呼吸出来ないのは文字通りの意味だ。  
液体の中に居るからね。

それにしてもさ、俺死んだんだよな…。

さっきの神の口ぶりでは、俺は殺されたようなもんだ…。そう考えると自分自身から黒い感情を抱いてくるが、いまの現状と状況の把握が出来ない…。

さっきまで、というか、いまも現在進行で混乱している自覚がある。どうすればいい？

冷静になろうとするが、現実離れをした出来事や現状、先行きの見えない事に対しての不安、いくつあげてもきりが無い不安要素に対して頭を痛める。

また、元の世界の神が言っていた言葉や死ぬ前の出来事で気になる点があるから整理しよう。

まず一つ目は、確定しているのはこの世界は、元の世界ではないこと。

二つ目、この世界の文明レベルは簡単に言う地球での中世ヨーロッパに似ていること。

三つ目、死ぬ前に、こちらの世界の根源と呼べる存在が口にしていたが、その存在との邂逅が決定事項と見ていいと予想される。

四つ目、仮に文明や全ての事が中世ヨーロッパと同じだとすると、王族や貴族、宗教関係に属する特殊な階級もありそうだし、一般的な生活水準や戦争、価値観なども視野に入れたりすると様々な問題がある。

いま、思いつくのはこのぐらいだ。

焦っても仕方ないし、体の自由も利かない、やれる事と言ったら、今の現状やこれらからの事を予想し、覚悟を決めよう。

そうして、自分自身を落ち着かせながら思考に入るのだった。

どのぐらい時間が経っただろうか？

自分の中で現実を受け止め、予想される出来事に対して覚悟を決め終えたが、何分、時計がないため時間が把握出来ない。

意識が戻ってから、数分しか経ってないかもしれないし、数時間か

もしれない、もしかしたら数日、数週間、数ヶ月、数年経ってるかもしれない。

まあ、時間の流れを掴めないからなんとも言えないが…。  
そんな事を考えると異変を感じた。

体は自分の意思では本当に少ししか動かないが、そういう意味とは別の意味で、体が動いている。

そんな中、自分の感情の中に喜びというものが出てきた。  
すこし驚きながらも、体の動きに身を流したのだった。

## プロローグ 1 (後書き)

うっ……文章って難しい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0713z/>

---

厨二病患者の基地外的思想

2011年12月11日01時02分発行